

美術科教育学会通信 NO.36

2000年3月10日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室
TEL: 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509,7508 (同)
通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

第22回 美術科教育学会 兵庫大会

2000年3月27日(月)~29日(水)

越境は容易になったが...

- 兵庫大会の開催にあたり -

兵庫大会実行委員長 辻田嘉邦

第22回大会を迎える美術科教育学会が、兵庫教育大学を会場に開催される。

この兵庫大会のメインテーマは、2000年という世紀の節目を意識してか「越境の時代」と設定し、今日的な教育の課題に対峙し、美術科教育の有り様を見定めることをめざしている。

過日「知の境界へ向かう冒険」と題した講演を聞く機会があった。講師の吉岡洋氏は「越境」について触れ「最近、越境が極めて容易になり、飛行機で一飛びいずれの国境も通過できるようになった」と述べ、海外に入りする人々の状況を楽しく語られた。そして、今や越境には冒険心は不要になったと説かれ、このことは、人間にとって手放して喜ぶべきことかとの疑義も出された。

彼の講演を拝聴しながら、私は、教育における「越境」の論議も、また然りではないかと「総合的な学習の時間」への熱狂的な関心や気運に思いを馳せてみた。

確かに、一昔前は「越境」と言えば、余りよいイメージではなく、越境入学などに見られるように何か制度や秩序、きまりに違反するようでタブー視されていた。この越境観は学区制度だけでなく、教育内容や活動におい

てもあの時間割りに見られるごとく、区分けし、枠決めし、整然とした境界を設けることが教育の効率を高める最上のシステムと見なされていた。だから、越境を企てるにはかなりの勇気と冒険を必要とした。

ところが、今日この掟は、徐々に懐疑されるだけでなく、諸々の問題に突き当たる結果を招いた。特に、そのことへの気付きは、芸術の分野で覚醒され、モダニズムへの反旗の輪が広がったと言われている。教育においても、合科、総合、ボーダレスといった学習への希求がその現れで、学びの垣根を取り去り越境への道を開こうとした。この勢いが総合的な学習、横断的学習、縦断的学習といったインターディシプリナリーな学びを教育の前面に押し出し、越境に対しては、もうためらうこともなく、勇気や冒険も必要とせず「越境の時代」を迎えようとしているかに見える。まさに飛行機で容易に一飛びできる越境の時代が到来したかのようである。

だが、この容易で安易な越境は、果たして教育に何をもたらすのだろうか。飛行機で一飛びし、大急ぎで舞い戻り何も変わることに無い空しい結果に陥るのではないだろうか。インターディシプリンという言葉には「複数の分野にまたがる」とか、「学際的な」あるいは「実践的な」という意味や意図が込められている。これらの意味や意図を実現するためには、それなりの知の境界へ向かう叡智と冒険を抜きにすることはできないであろう。

本大会において、諸兄姉の豊かな叡智と冒険心を結集して実りある「越境の時代」に対する協議と提言を願い、兵庫大会開催にあたっての挨拶にかえさせて頂こう。

第22回美術科教育学会プレ学会報告及び本学会参加案内

福本謹一 & 高木厚子

第22回美術科教育学会兵庫大会(実行委員長辻田嘉邦・副委員長東山明)のプレ学会が平成11年12月4日にサクラクレパスビル会議室(大阪市中央区森ノ宮)にて開催された。兵庫大会のテーマである「越境の時代・芸術教育実践学の視座」を美術・音楽という芸術教科の枠組みにおいて検討することを主眼としてシンポジウム形式で行われた。

このプレ学会は、芸術教育実践学会(事務局兵庫教育大学)との共催という形をとり、パネリストには、文部省から峯岸創(教科調査官・音楽)、芸術教育実践学会から長島真人(鳴門教育大学・音楽教育学)、有道惇(岡山大学・音楽教育学)を迎えるとともに、本学会からは永守基樹(和歌山大学)、茂木一司(群馬大学)を加えた5氏による芸術教育の実践における「越境」について検討がなされた。コーディネーターは、兵庫教育大学の辻田嘉邦が務めた。

永守氏は、芸術教育において現実的に進捗しつつある「ジャンルの越境」を「a.教科統合」「b.総合学習」「c.教師個人が、それぞれの芸術形式を逸脱する活動」の三つの流れとして把握し、さらに芸術教育の越境を考えるための四つの視点として、「1.教育の越境」「2.芸術の越境」「3.メディアの越境」「4.身体の越境」を示しつつ、その展開と可能性について述べた。また今後の課題としては、それらの「越境」の根底にある「芸術と生活」「芸術と社会」の諸関係の変動の把握、そして子ども達の「身体と感覚」への眼差しが重要であることを示した。

茂木氏は、シュタイナー教育を例にあげて制度的なものよりも精神領域における改革的契機を求めることが重要である点を指摘した。また、芸術の統合は目的論的な志向によるのではなく、手段化・方法化という過程重視の

取り組みをめざすことを提案した。一方で芸術の統合もしくは総合学習の導入には、イギリスのプロジェクト学習のように継続的な実践の積み重ねが不可欠であるとの慎重な姿勢を示した。

長島氏は、教科教育実践学の構築を教師の力量形成の視点から問題提起を行った。教科教育の体系的把握を通じてシンボル、意味、人間形成という本質論から学習論に至るまで本質的な理論と実践の継続的な再考過程を重視し、教科の専門的な知見を最優先しながらも、子どものトータルな発達との相互関係性を重視することが芸術教育実践学の基本的な視座になるとの指摘を行った。

紙面の関係でその他二氏の提案内容については省略させていただくが、従来の芸術教育論では捉えきれない実践の質的多様性に迫り、子どもの芸術的な営みから教育実践を捉え直す契機とすることが芸術教育実践学における越境の意味するところである点が確認された。

第22回美術科教育学会兵庫大会の本学会は、兵庫教育大学キャンパスに場所を移して平成12年3月27日(月)より29日(水)まで開催される。日程等の詳細は同封される予定の最終案内を参照されたい。

シンポジウムI「美術は子どもたちに何を伝えられるのか」(27日)

* コーディネーター

東山明(神戸大学)

* パネリスト

島本 澁(帝塚山学院大学・美術史)

中村 茂(筑波大学・CG)

椿 昇(美術家)

* 司会 福本謹一(兵庫教育大学)

シンポジウムII「実践学の構築-現場からの視座(美術教育における校種間の連携に向けて)」(28日)

* コーディネーター

板良敷敏(文部省教科調査官)

* パネリスト

中島慎一(滋賀県立守山高校)

谷山 育（大阪市文の里中学校）
大橋圭介（福岡県山川南部小学校）
* 司会 初田 隆（兵庫教育大学）
また、口頭発表は最終的に 61 件となった。
その他28日には例年通り以下の研究部会を昼
食時に予定しており、学会員の参加をお願い
したい。

- ・工作工芸領域部会
- ・美術教育の課題と授業研究部会
- ・国際研究交流部会
- ・美術教育史部会
- ・アミューズ・ビジョン研究部会
- ・基礎データベータ構築部会

学会員には、事前の申込をお願いしたいの
で、早急に郵便振込・宿泊希望を提出してい
ただきたい。宿泊は実行委員会の方で取りま
とめており、まだ余裕があるので、宿泊日を
明記の上お願いしたい。以上。

連絡先

福本謹一(Kinichi Fukumoto)
fukumo@art.hyogo-u.ac.jp
〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1
兵庫教育大学芸術系教育講座
0795-44-2255 (研究室直通)

平成 11 年度文部省科学研究 費補助金採択課題 本学会関 連一覧

事務局 宇田秀士

本年度の学会関連、学会員による科研採択
課題（研究代表者、テーマ、配分金額）をお
知らせいたします。事務局に寄せられた情報
並びに以下の文献を参考にして作成しました。

科学研究費研究会編『平成11年度文部省科
学研究費補助金採択課題・公募審査要覧
（上）、（下）』ぎょうせい、1999年9月
また、今回、漏れていた研究がありましたら、

事務局（宇田）までお知らせ下さい。次号に
掲載いたします。その他、ユニークなプロジェ
クト、企画を行っている会員からの紹介もお
待ちしております。

< 研究成果公開促進費 >

学術定期刊行物

『美術教育学 - 美術科教育学会誌』第21号、
50万円

< 基盤研究(C) >

新規分

立原慶一：美術教育における「題材論的方
法」の研究 - 「題材と表現主題の関係項」
をめぐって -、120万円

継続分

宮坂元裕：各教科における学習課題の成立
過程の比較及び教科間の関連に関する研究、
50万円

山田一美：教員養成系学部・大学院におけ
る教師教育のための美術教育実践の研究、
50万円

福本謹一：造形体験を促進する学習ソフト
ウェアの開発、50万円

増田金吾：児童画に関する比較研究 - 日本
（北海道）と英国（北アイルランド）の場合 -
90万円

福田隆真：表現教育の可能性としての芸術
と情報のカリキュラム研究、90万円

< 萌芽的研究 >

継続分

石川誠：地域の美術館利用を媒介にして、
小・中学校の連続性を図る鑑賞教育の試行、
80万円

< 奨励研究(A) >

新規分

佐々木宰：総合的な学習の教材化のための
デザイン・工芸教育に関する研究、80万円
石崎和宏：美的感受性の発達における思春
期の典型的特性と美術鑑賞学習の適時性
に関する研究、130万円

継続分

本村健太：マルチメディア時代のパウハウ
スとメディアリテラシー教育の研究、

60万円

直江俊雄：リチャードソンの教育方法に基づいた視覚的表現の多様性に関する研究、

50万円

宇田秀士：近代日本美術教育における《中央の制度・政策決定》と《地方教育現場での撮取・定着》、50万円

三根和浪：小学校美術鑑賞における教材提示メディア及び教材配列の適正化に関する研究、20万円

小野美恵子〔おの みえこ〕(福岡市立福岡中学校・富山大院)

杉野佳紀〔すぎの よしのり〕(近畿郵政局大阪物流サービス株式会社)

高橋英理子〔たかはし えりこ〕(神戸大院)

一井弘子〔いちのい ひろこ〕(神戸大院)

斉藤暁子〔さいとう ときこ〕(岐阜県郡上郡八幡町立八幡中学校・鳴門教育大院)

新入会員のお知らせ

事務局(庶務担当) 永守基樹

去る2月11日(金)に開かれた総務会において、以下20名の方々の入会が承認されましたので、お知らせ申し上げます。

遠藤智美〔えんどう ともみ〕(福島大院)

須藤亜貴〔すどう あき〕(福島大院)

大原浩照〔おおはら ひろあき〕(福島大院)

平塚学〔ひらつか まなぶ〕(福島市立金谷川小学校・福島大院)

矢野 真〔やの まこと〕(東京芸術大学)

竹綱珠衣〔たけつな たまえ〕(大阪府箕面市立箕面第三中学校)

平田祥子〔ひらた さちこ〕(群馬女子短大附属高等学校)

宇賀神俊彦〔うがじん としひこ〕(宇都宮大学教育学部附属中学校)

細内俊久〔ほそうち としひさ〕(宇都宮大学教育学部附属小学校)

鈴木 斉〔すずき ひとし〕(福生市立福生第三中学校・東京学芸大院)

今井真理〔いまい まり〕(愛知教育大院)

増山有美子〔ましやま ゆみこ〕(宇都宮大院)

谷山 暁〔たにやま あきら〕(堺市立野田中学校)

坂本顕子〔さかもと あきこ〕(千葉大院)

森岡茂勝〔もりおか しげかつ〕(兵庫教育大学)

住所不明の会員について

事務局より御願い

事務局代表 長谷川哲哉

下記の会員は住所が不明のため、学会通信や学会誌だけでなく、会費の納入振込票も返送されてきています。返送されてくるようになった時点はまちまちですが、全員が退会届を出しておられません。そのため会員としての権利と義務が果たされておりません。また会員名簿や学会会計の管理に支障をきたしています。

そこで学会本部として、下記の会員の現住所をお知らせいただきたく、広く会員にご協力をお願いする次第です。

住所不明のままですと、会費の納入義務が果たされず、結果として、除名という不名誉なことになりますので、お知り合いの方は是非とも情報をお寄せください。除名されますと、再度の入会は認められません。

池川 直	岩田政巳	上野美和子
江淵弘明	大塚謙一	大塚由紀子
大脳潤子	大西孝一	桑原玄二
小沢基弘	小平廣幸	今 香
斎藤郁子	斉藤玲子	銭 初薫
田口正裕	鶴園秀子	富永淳一
豊島和加子	中山有史	長井 肇
橋本 務	春日真理子	宮下幾子
森本紀文	山田俊二	堀内アリッセ泉

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

米国コロンバス市の Arts IMPACT School

石崎和宏（秋田大学）

昨秋からオハイオ州立大学に滞在し、子どもの美的感受性に関する発達について日米の比較研究を進め、また現地の学校の特色あるカリキュラムとその実践の情報収集を行っている。その中で Arts IMPACT School の実践がたいへん興味深いので紹介してみたい。

Arts IMPACT は、1960 年代に米国の各地で芸術教科が学校から削られたのに対して、1970年に100万ドルの基金を受けて始まった2年計画のプロジェクトで、オハイオやペンシルバニアなどの5つの州で実施された。

IMPACTとは、Interdisciplinary Model Program in the Arts for Children and Teachersの頭文字で、芸術を中心とした統合的なカリキュラムモデルであり、コロンバス市では現在も小学校2校、中学校1校で引き継がれている。それらの実践を参観した感想は、まさに強いインパクトである。

Arts IMPACT 中学校の Howard 先生は、Arts IMPACT の魅力は、なによりも芸術、美術、音楽、ダンス、ドラマを中心として統合的で弾力的なカリキュラムを編成している点であると強調する。この中学校では、各学年とも毎日午前中の一コマ 65分は3～4週間を単位とした芸術教科あるいは芸術と他教科とを関連させたプロジェクトの時間帯としている。私が参観し始めた時は、ちょうど「日本文化」をテーマとして学習が行われており、生徒

はインターネットで日本についての情報を収集し、墨絵や魚拓、俳句などを制作していた。そして最終日には親や市の教育委員を招待し、茶会を催して自分たちの学びを披露した。美術、ドラマ、社会、情報の各先生方の連携によるこのプロジェクトで、4週間集中的に学ぶ生徒の姿はたいへん意欲的であり、参観する私にも様々な質問をしてきて少しでも多く日本を知ろうとしていた。

また、Arts IMPACT School で特筆されるのは、芸術教科以外の指導においても教授方法として芸術的要素を積極的に取り入れている点である。例えば、Arts IMPACT 小学校5年担任の Fisher 先生は、タングラムを取り入れた算数の授業について語ってくれた。「なぜ、そうしているのか。」芸術を取り入れる方が一番効果的だから。」その回答はとても明快だった。この小学校は1993年にオハイオ州のベストスクールに選ばれ、また到達度テストでの得点も1996年に市内でトップとなり脚光を浴びた。もちろん、入学は抽選で決められ、才能ある子どもを集めたわけではない。この小学校でもう一つ驚いたことは、一クラス25人の児童に対する芸術をコアとした授業が、芸術とクラス担任の計5人のティームティーチングによって、きめ細かな指導を実現していたことである。

なぜ、コロンバスではArts IMPACTが継続しているのか。その原動力は市民の理解にある。当初小学校のみだったArts IMPACT Schoolは、市民の強い要請で4年前に中学校もスタートした。ただし、特別な予算がついたわけではなく、他の公立校と同じである。そのため中学校独自のTシャツを販売したり、Re-Artと呼ばれるリサイクル機関と連携して教材を備えるなどかなりの自助努力である。さらにArts IMPACTにおける最大の課題は教師間の相互理解だとHoward先生は言う。彼女は他の教師のために年間48時間以上の研修会を設けるなど、強いリーダーシップをとっている。コロンバスのArts IMPACTの成功の背景には、彼女のような芸術教師のパワーも大きくあることを痛切に感じた。

研究ノート/実践報告

ヨハネス・イッテンと 我が国との接点

- アンネリーゼ・イッテン夫人との出会い -

金子直正（高知大学）

私はこれまでバウハウスの教育理念について研究を行ってきた。バウハウスのマイスター達が残した著述には、「対極の概念」や「対比の思考」が頻繁にみられ、教育に生かされていたことが分かった（拙稿「バウハウスにおける造形教育理念に関する一考察 - 対極の概念と対比の思考 - 」バウハウス叢書別巻1『バウハウスとその周辺』所収）。この研究は現在も継続して行なっている。

バウハウスの創設期における予備課程を担当したヨハネス・イッテンは、「コントラスト」を教育の中心におき、東洋の思想からも影響を受けたと言われている。イッテンのバウハウスにおける教育は、同校の創設期から初期の段階に限られている。そこで、イッテンがバウハウスを退職した後、彼がベルリンに創設した造形美術学校「イッテン・シューレ（Ittenschule:1926 - 1934）」に着目した。特に、我が国でもよく知られているイッテンの名著『造形芸術の基礎』に登場する学生作品の多くはイッテン・シューレからのものであり、イッテン自身もこのことについて同書の本文中で述べている。

イッテン・シューレについては、我が国ではあまり触れられることがなかった。しかし、丹念に資料を解きほぐしていくと、我が国との接点をいくつか発見することができた。

私のイッテン・シューレに関する研究は、竹久夢二が1933年にイッテン・シューレにおいて行なっていた日本画（墨絵）の授業の研究から始まった。夢二研究家の間では、「一天画塾」と称されて年表等で触れられていたが、美術教育の世界ではあまり知られていなかった。

そこで夢二の資料をあらためて調査した。夢二研究の第一人者長田幹雄先生宅では、夢二がイッテン・シューレで行なった授業のテキスト（ドイツ語、タイプ打ち）を見せて戴いた。このテキストの一部は、夢二直筆の日本語による草稿が存在する。これらの資料を基に、夢二がどのようにして日本の墨絵を教えようとしていたのかについて考察を行なった。テキストは、「日本画に就いての概念（Der Begriff der japanischen Malerei）」と「線について（Ueber die Linien）」であるが、前者は、気韻生動、日本画と西洋画の比較、余白、茶道、俳諧等に触れながら日本文化の精神性と日本画について夢二が記しているもので、Takehisa Yumeの記載があるが、後者には夢二の名が記されていない。そこで、両者の内容を比較検討し、私は「線について」も夢二のものであると考えた（拙稿「イッテン・シューレにおける日本画の授業について」『大学美術教育学会誌』第25号1993年）。

その後1994年にチューリッヒ在住のアンネリーゼ・イッテン夫人のもとを訪れた。夫人は、様々な資料を見せて下さり、色々とお話をして下さった。そこで、夢二の資料について夫人に尋ねたところ、私がかつて長田先生宅で拝見したテキストと同じものを見せて下さった。しかも先に述べた「日本画に就いての概念」と「線について」が二つ合わせて綴じられており、その上に夢二の描いた表紙絵が付されていた。表紙絵には、『日本画に就いて』と毛筆でかかれてあり、夢二の署名と落款があった。このことから、「線について」のテキストも夢二のものであるという私の考えが証明された。さらに夢二が授業中に練習用に描いたと考えられる墨絵の作品やイッテン夫人をモデルに描いた作品などを見せてもらった。特に「この作品は、私がモデルなのよ」と話すイッテン夫人の嬉しそうな顔は忘れられない。これらの作品については、既に昭和63年7月20日付けの日本経済新聞において、映画監督・藤林伸治氏が図版入りで報告しており、決して新たな発見ではないが、それらの墨絵がどのようなものか私もこの目で確認できた。

その作品群のほとんどには夢二の署名はないが、それらの絵には夢二特有の線が表われている。この日は、はるばる遠方より御子息であるトーマス・イッテン氏も駆けつけて下さった。また、夫人は私のためにイッテンに関連する書物に署名して下さり、贈呈を受けた。私も、先に述べたイッテン・シューレにおける竹久夢二の授業についての論文やそれまで私が書いたカンディンスキーやモホリ＝ナギに関する論文を夫人にお渡しすることができた。夫人に手伝ってもらいながら資料や作品を写真に撮らせてもらったことや、イッテンのアトリエや書斎を見せて下さったり、夫人の運転でレストランへ案内され、イッテンが好んで座っていたというテラスの座席に座って食事したことなども懐かしい思い出となっている。さらに、スイスの書物などに紹介されているイッテンが1931年に制作したとされる、鶏や花などの墨絵作品も夫人は見せて下さった。これは、イッテンが夢二に出会う以前のものである。その後1996年文部省の派遣でドイツ・スイスを調査した際に、ベルン国立美術館においてイッテンの1930/31年の日記を調査した。そこでは、日本語の印刷物や絵葉書、墨筆等、イッテンが夢二以外の日本人画家と接触していたことを示す資料を見つけた。この資料に関連して調査を進め、水越松南がイッテン・シューレにおいて南画の指導を行っていたことやその指導の内容を明らかにした。夫人宅には1996年にも訪れた。その際も夫人は熱心にイッテンの日本への興味を語ってくれた。夫人もイッテンの影響からか、陶芸作品(抹茶茶碗等)を制作されており、いくつも作品を見せて下さった。

また、イッテン教育の我が国への受容については、自由学園から1932年にイッテン・シューレへ留学した山室光子・笹川和子両氏へのインタビューを試み『構成教育大系』に二人がイッテン・シューレで制作した練習作品等が掲載されていることなどを明らかにした(拙稿「イッテン・シューレにおける造形教育の我が国への受容過程に関する一考察 - 山室光子・笹川和子両氏の業績をふまえて - 」

『美術教育学』第16号1995年)。さらに、当時の学校案内を基に、イッテン・シューレの教育目的や具体的な教育内容について明らかにし、考察を行なった(拙稿「イッテン・シューレにおける教育内容について」『美術教育学』第20号1999年)。

このように、夢二の授業用テキストの検討に始まり、イッテン・シューレ自体を研究することになった。その後チューリッヒのアンネリーゼ・イッテン夫人宅を訪ねたり、ベルンのパウハウス・アルヒーフやベルン国立美術館に資料調査に出掛けることになった。1998年には、INSEA アジア・東京大会においても夢二の教育について発表した。これらの研究を通じて、欧米でもまだ研究があまり進んでいないイッテン・シューレの全体像を徐々に明らかにすることになった。

この研究においては、とりわけイッテンと我が国との接点がある。単に外国のものを取り入れるだけではなく、日本人が外国に与えている影響にも目を向けることによって、自分たちの文化を見つめ直すことが大切である。夢二のテキストからも、今日の我々が再確認しなくてはならない日本文化における精神性が読みとれるのである。科学が進歩し、美術教育の方法論に様々なものが登場しているが、一方で、先人の業績を謙虚に見直し、新旧のバランスを図るとともに、文化的視点から美術教育を捉えていくことが重要であると考えている。(15.Feb.2000)



アンネリーゼ・イッテン夫人と筆者
ヨハネス・イッテンの書斎にて 1994年撮影

『アルタミラ通信』の 創刊について

岩崎 清(こどもの城造形事業部/
『アルタミラ通信』編集長)

かつて私たちは生きるという座標軸のなかで、教師、生徒としての子ども、父母・兄弟姉妹、社会人としての大人など、家庭や社会や地域において一人ひとりの座標を辛うじて見いだすことができました。生きる環境が大きく変化したとはいえ、今の時代ほどこの座標を定めることが困難な時代はありません。それぞれが自分というものを確定することが困難なために、自己存在と社会的自己とをこの座標軸に投影することができなくなっているのです。だからと言って、少し緊張感の張りつめた人間関係が支配し、社会的な役割が比較的鮮明であった過ぎしの日々を黄金時代であると徒に郷愁しているわけではありません。現在、半世紀の民主主義という壮大な実験の過程で極端な商業主義や政治の墮落に先導された、私たちの遭遇しているこの価値の崩壊は、正負の磁場嵐の中で、かつて体験したことがないほど深刻です。

ですから、現場や学問の場にいる志のある良心的な人びとが次代への展望を構築しようとしても、その崩壊の規模が余りにも巨大なので、それを乗り越える再構築の仮説さえ築くことができないのです。目の前にある古い価値の周囲を狼狽して徘徊するだけです。まさにあらゆる領域で自らの方向を指し示してくれる「羅針盤」がないのです。古い羅針盤は役に立たず、瓦解した価値の死滅体をかきわけて突き進む新しい羅針盤をつくり出さなければなりません。

それは最近の二つの事件からも明瞭に指摘できます。一つは、日教組が国との和解を目

指し、戦後半世紀にわたって、国と思想闘争しながら死守してきた今までの教育理念を放り投げてしまったことです。しかし、それまで指導してきた執行部の人たちは鮮明な方向転換の考えと来るべき時代に備える子ども観やそれに基づく教育論を再編成できていないこと。もう一つは日教組の方向転換に踵を接するようにして、学校教育の中から美術教育の時間を削減する方向で、文部行政が芸術的な感性教育は学校だけでなく、家庭や地域社会や社会教育施設でも担ってほしい、という方針を明らかにしていること。つまり、これは国が学校教育で担うべきもっとも必要な感性教育と学校のみが行える価値の再生産という営為を課外に放り出した、非常に無責任な行為です。

そして、価値の崩壊というこの大きな問題に引きずられ、私たちが課題にする教育をめぐる問題も同じ状況と言えるでしょう。教科や学力の問題・新しい子ども観・生徒と教師の問題・家庭と学校など大から小までどこから手をつけてよいか、学校の中だけではもはや解決策が見いだせないまったくの閉塞的な状況です。かつては学校という聖域の中だけで教育が行われていました。しかし「教育」という意味が今までの内容から大きくはみ出して、直面している事態は、学校を中心として社会が取り組まなければならないほど広範囲にわたっています。

学校からも国からも見放された子どもたちは何処へ行くのでしょうか。教育というものは、取り返しのきかない不可逆的な実験と譬えることができますが、この《実験》の対象であった子どもたちが寄る辺なき漂流をはじめているのですから、救済の措置を直ぐにでも講じるべきです。と同時に、私たち大人も、子どもたちを導くための根拠地として知の港を築かねばなりません。

もし学校が自らの力だけで解決できない問題を背負い込んでいるならば、学校を取りまく地域社会が協力して、子どもが将来生活するであろう社会に適応できるように教育し、指導する必要があります。このような状況の

中で、私はこれからの私たち市民の日常生活を豊かにするために、創造性の活性化や自己確立の手助けをする意思の疎通の手段として、「社会における芸術の役割」を考える雑誌が必要なのではないかと実感するようになってきました。そしてその結果、子ども・美術・教育・家庭・市民・美術館・社会などの諸問題を中心にした雑誌『アルタミラ通信』を発行すると決意したわけです。

私がこうした着想を徐々に明確化してきた最も大きな契機は、イタリアの芸術家ブルーノ・ムナーリ(1907 - 98)に出会ったことでした。ムナーリは「未来派の第二世代」の芸術家として出発しましたが、社会における芸術の役割について深い洞察を行い、「芸術は難しいものではなく、市民の生活を豊かにするものである」という考えをもち、制作者でありながら市民の情操を豊かにするために、市民の感性に関するさまざまな啓発活動を終生実践しつづけた人物です。ムナーリは、美術を成り立たせている基本的な要素を平明に解きあかし、子どもから大人までを対象に、市民の眠れる感性を覚醒する実践を行い、視覚言語の大切さを説きつづけた近代の美術史上希有の芸術家です。またこうも言っています。「芸術家は自分に与えられた芸術的な資質を自らの表現だけに費やさずに、社会のために、とくに未来の大人である子どもたちの情操の教育に役立つように手助けをするべきである。」

ムナーリが目指した、この「芸術と市民」の熟き関わりこそが、私たちが人間らしく生きるために現在もっとも必要なことだと確信します。子どもの未来に関心のあるすべての大人たちの間に、芸術と市民を柔軟にかつ堅固に結ぶ《通底器》として、草の根的な「美術教育」の相関的な動きが必要であると痛感しています。

子どもを含めた市民がもっと自由にもっと豊かに生きることができるよう尽力した先駆者ムナーリが探究してきた「芸術と市民との柔らかくて親密な関係、あるいは芸術の原理的なものを易しく普遍化すること」を中軸

に据えることが、私たちの座標の確定に最も必要なことだと実感しています。こどもの城での私自身のささやかな実践活動からえた経験を背景に、上記のような現代社会の根本的な問題を取り上げ、それについて関心のあるすべての人びとを交えて自らが生きている社会を豊かにするための雑誌にしたいと考え、勤務先の「こどもの城」とは関係なく個人的に『アルタミラ通信』を発刊することを決意しました。

彼が提起した「芸術によるより豊かな市民生活」を貫く問題意識は、私たちが直面している文明的な課題にまさに集約されていると考えます。そして『アルタミラ通信』は、ムナーリのこの思想を顕彰するために、《ムナーリ研究欄》を設けています。

私たちが「美術教育」とそれに関連する領域の中で、「より豊かで自由な生活」を営めるように、多くの人びとと草の根的に連帯して作業ができる根拠地として『アルタミラ通信』が機能することこそ、発刊の意図なのです。そして、抽象的な議論ではなく、私たちは言葉の内容を具体化する対話の過程で、子どもたちの明日の教育を作り上げる方法を探り出したいと考えています。

そして最後に子どもたちの未来への改革を志す読者にお願ひです。『アルタミラ通信』の紙面作りに参加し「定期購読者」として建設的に『アルタミラ通信』を支持して下さるよう連帯をお願いします。

また美術雑誌編集長；美術館学芸員；美術教育雑誌編集長；小学校教諭；中学校教諭；大学教官などをまじえて、「感性教育を考える会」を結成し、4月から公開セミナーを企画し、これからの美術教育について考えてゆく予定です。ご協力をお願いします。

『アルタミラ通信』編集部の連絡先は下記の通り；

〒168-0082

東京都杉並区久我山 2-23-7-110

TEL & FAX 03-3333-6282

情報コーナー

投稿原稿の募集について

「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート／実践報告」の各コーナーへの投稿を募集しています。原稿の字数等は以下の通りです。

1頁にまとめていただく場合「20字×76行（最大1,520字）」以内

2頁にまとめていただく場合「20字×162行（最大3,240字）」以内

*文字数が を超える場合は、1頁当たり「20字×86行」を加えてください。

*なお、写真・図版などの掲載も可能です。その際は上記の文字数から図版分をおおよそで結構ですので減じてください。

[註]編集ソフト(PageMaker6.5J)の関係で、実際のレイアウトは上記の字数、行数とは異なる場合がありますので、ご了承ください。

なお、次号(No.37)の発行は6月上旬を予定しています。次号向けに投稿される方は、原稿を5月15日(月)までに下記通信担当又は世話人宛に、E-mail、郵送等でお送り下さい。

事務局通信担当 / 宇田秀士

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
TEL&FAX : 0742-27-9223 (研究室直通)

E-mail:udah@nara-edu.ac.jp

学会通信世話人 / 新井哲夫

〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 群馬大学教育学部
TEL&FAX : 027-220-7316 (研究室直通)

E-mail:arai@edu.gunma-u.ac.jp

会員に関する情報提供のお願い

会員に関する情報(出版、異動、住所変更、受賞などの情報を随時掲載します。情報検索の公平さを考慮し、掲載内容については自己申告を原則とします。

掲載を希望される方は、掲載を希望する内容等を上記事務局通信担当又は世話人宛に、E-mail、FAX等でお知らせ下さい。

たんぽぽたんぽぽ砂浜に春が目を開く

(荻原井泉水)

寒かった2月も終わり、春の陽射しが馴染むようになってきました。

先日、学会元代表理事の鈴木寛男先生のお導きで、奈良女子高等師範学校附属小学校教諭兼訓導(後に教授)であった横井曹一氏(1886-1965)の御自宅にお邪魔する機会を得ました。

当時の奈良女高師附属小といえ

ば、大正自由教育のメッカ

ともなりましたが、横井氏も児童の自発性を尊重する「自然的自由手工」を提案され、御活躍になられました。

今回の訪問は、鈴木先生の御自宅と横井邸がすぐ近くであったことから実現しました。現在は、お孫さんである紘一氏がお住まいになっています。

曹一氏が描かれた水彩画(教科書の挿し絵などにつかわれたと考えられる。)やガリ版刷りの文章など貴重な資料を見せていた

だき感激しました。さらに、脈々とつながる「ものづくり、創造の心」といったようなものにも感じ入りました。

宣伝会社を経営されているお孫さんの紘一氏は、東京と奈良を行き来しながら、コンピュータを駆使して宣伝のお仕事をされています。また、「感性工学に関する学会」の旗

揚げをされたばかりでした。さらに、紘一氏のお父様(つまり曹一氏の息子さん)も、造船(設計)に携わっておられたということでした。

こうした三代にわたる「創造の心、魂」を見るにつけ、我々の学会にそうしたものは、受け継がれているのか考えさせられました。

美術教育に関する真剣な議論が、「魂」や絆を育くむはずです。学会の意欲的なシンポや口頭発表を生かすも殺すも参集者の熱意ある発信にかかっているといえましょう。兵庫では、多いに語りあい、閉塞状況を打ち破る基盤を形成いたしましょう。 宇田)

編集後記